

# 学級経営の日本型特色に着目した「学級通信」の活用について

- ナラティブ・アプローチの枠組みを用いて -

## Class Management in Japanese Type Character Focused on Classroom Newsletter

Narrative Approach within the Framework

山田 宏

Hiroshi Yamada

### 摘 要

学級経営には、授業成立の取り組み（条件整備型）と学級づくりの取り組み（学習と生活指導の調和型）とがある。日本は、以前から学級文化活動（文集づくりや様々な集会活動など）が根付いており、学級づくり型と言える。そこで、教師と子どもとの対話を重視するナラティブ・アプローチの考え方を取り入れて、自ら作成した学級通信を分析した。その結果、教師の指導の観点やどのようにして問題事態を解決しようとしたかという背景が浮き彫りになった。

キーワード 学級経営 学級通信 ナラティブ・アプローチ 感情を持つ記録  
ナラティブ・コミュニティ

### 問題の所在

今日、日本の学校では、「学級」の拘束性や硬直性が問題視されている。ここ20年来、校内暴力やいじめ・不登校・学級崩壊など、学級にかかわる社会問題が大きく報道されてきた。こうした状況の背景には様々な問題が複合的に介在しているので、簡単に解決策を見出すことはできないが、学校は学級集団の在りように敏感にならざるを得なくなり、学級担任が日常的にかかわる「学級経営」を問題視せざるを得なくなっている。

そもそも学級経営は、古くより「学級王国」と呼ばれる日本型のシステムを形成し、教科指導である授業と文化的な活動をあわせもって機能していた。しかしながら、その方法等については一定の理解が定着していないのが実情である。学級経営は学習指導要領で明記されているわけでもなく、教科の授業のようにカリキュラムや評価基準があるわけでもない。したがって、学級担任が自ら独自に学ぶか、先輩教員から指導を受けるかして身につけるものとされてきた。なぜこうした状況が長年続いてきたのか。それは、学級集団の

捉え方の多様性が一定の理論や方法論を生み出しにくくしているためと考えられる。そのため、今日のような学級における授業妨害や学級崩壊などの問題事態が噴出すると、従来の学級経営にとらわれた拘束性や硬直性が問題になるのであろう。さらに、新自由主義の教育政策によって、少人数型学級指導や習熟度別学級指導などが導入され、従来の学級担任に負わされていた責任の範囲は大きく変動した。多様な学級経営観が学校の内部に混在することになったのではないだろうか。

そこで、今後の学級経営観をどのように打ち立てるとよいかについて、原点に戻って考えてみたい。いわゆる学級王国といわれる学級経営の中でどんな取り組みが行われていたかを探り、そこからどんな実践形態が望ましいかを検討してみたい。検討に活用するのは本稿の筆者である山田宏による実践記録『学級通信 6の2だより』（以下「6の2だより」と呼ぶ）である。なぜなら、学級通信は学級経営と深いつながりをもつからである。筆者はこれまでも毎年通信を発行してきたが、通信を発行する意義を保護者との交流・連携に関すること、児童の成長に関すること、教師としての反省・向上に関することが通信の重要な要素であると実感した。それは、次の主張にも見られる。『中学校教育実践叢書 No.25 学級・学年通信』という著作に掲載されている主張である。「学級にはドラマがなくてはなりません。生徒たちが生き生きと活動し、たくましく成長していく変革のドラマが。」「学級通信は、正しい教育目標と、それを達成するための科学的な方法と結びついたときに、多様な機能を発揮し、いくつもの目的をかなえる力をもっている」と述べ、さらに、学級通信の具体的な方法について次のように叙述している。第一は、「父母にたいして届ける、いわば経過報告書です。」第二は、「学級通信で学級の活動を報告しながら、そのうらで教師の教育観や教育目標を語ることです。」第三は、「職場の教師集団と地域社会への問題提起の意味があります。」とある<sup>(1)</sup>。

つまり、上記のような目標と方法で学級通信の機能を果たしている内容の通信を検討していけば、どんな学級経営が行われているかが分かると考えられる。「6の2だより」は、最終学年という6年生を担当したことをきっかけにしてこれまでの通信の集大成として作成したものである。

そこで、本稿では、一冊の通信から学級経営に果たした役割をめぐって十分考察したい。考察の観点としては、教室がさまざまなアイデンティティや教師と子どもによって紡がれていく場であり、一つの物語性をもっているとするナラティブ・アプローチの考え方を取り入れる。ナラティブ・アプローチとは、1990年代に開発され、発展してきた新しい心理療法の一つであり、最近注目されている。カウンセラーとクライアントとの間で、クライアント自身に起こった出来事や記憶などを自由に語らせ、症状を除去・改善するというものである。この方法の展開は、臨床心理や医療の現場で幅広く取り入れられているが、学校現場で注目を集めたのは、上記の著作（『中学校教育実践叢書 No. 25』）に見られるように、教室が子どもを変革するドラマの場であるという観点に立つ教師から支持され始

めたからであろう。ドラマの主役は子どもであり、教師は台本の作者であり、演出家であって、現実をダイナミックに変革するという立場である。ナラティブとは「語り」であり、アプローチは「接近」である。教室における教師と子どもとの様々な出来事や思い出に残るセレモニーを「語り」として記録に残し、それらに「接近」することによって、共によりよい生活の改善に寄与していくといった意味である。ナラティブ・アプローチを積極的に推奨している野口裕二は、次のように述べている。

われわれは時間の秩序のなかで生活を余儀なくされている。その時間の秩序に整合するようにわれわれの経験を組織化する必要がある、その際に、ナラティブという形式はもっとも基本的な形式となる。ナラティブはわれわれに時間の流れを意識させ了解させる道具として重要な役割を果たしている。 中略 ナラティブは無数に存在する出来事のなかから重要な出来事とそうでない出来事を選別してわれわれに伝えてくれる<sup>(2)</sup>。

では、一年間という長い学級経営の中で、どのような経験や出来事をどのように選別してナラティブに抽出していく必要があるのだろうか。それが課題である。

しかし、野口はその後、ナラティブ・アプローチをさらに発展させる研究としてフィンランドのセイクラらによって推奨されているオープン・ダイアログの考え方を支持している。まず、彼は次のように述べる。

ナラティブと対話は切っても切れない関係にある。対話のないところにナラティブは生まれず、対話こそがナラティブを変容させていく。ナラティブ・アプローチは対話を重要な要素として発展してきた<sup>(3)</sup>。

さらに、次のように述べる。

オープン・ダイアログはさらにその対話の生成する場所であるネットワークを重視し、そこに直接働きかける点、言葉のない経験に言葉を与える点、そして、愛という感情の生成を重視する点でナラティブ・アプローチと異なっている<sup>(4)</sup>。

つまり、どのような経験や出来事を取り上げるかだけでなく、その経験や出来事が生じてきた背景にあるネットワークに注目する必要があるとしているのである。

そこで、上記の観点に従って「6の2だより」を分析、検討したいと考える。そうすることで、一冊の通信から学級経営がどのように行われたかを把握し、家庭生活や社会状況の中などの文脈に位置付けられた実践がどのように行われたという理解が進むのではないかと思われる。そして、今後、子どもたちにどのような働きかけをすると、子どもの声が

聞ける実践が出来るかを考える手立てを探っていきいたい。

次に、「学級王国」と呼ばれる日本型のシステムは、どのような実践内容で行われていたのかを先行研究から明確にした上で、検討に入る。

### 先行研究にみる学級経営の日本型システム

我が国において学級制が成立したのは、1891年（明治24年）に出された「学級編成等ニ関スル規則」においてであり、以下のような定義を与えられた。

本則ニ於テ学級ト称スルハ一人ノ本科正教員ニ於テ同時ニ教授スヘキ一団ノ児童ヲ指シタルモノニシテ従前ノ一年級二年級等ノ如キ等級ヲ云ウニアラス<sup>(5)</sup>

1872年（明治5年）に太政官より発せられた「学制」で導入された等級制を廃止して、「等級制よりも、児童を数量としての『団体』でとらえる『学級』制の方がよりふさわしい編成方式<sup>(6)</sup>」という考え方で施行されたとされている。ここから、試験による進級性が否定されて学級制の意義づけがなされていく。

1900年代（明治30年代）になると、児童の個性の観察や属性及び保護者の状態などを捉える必要性が主張され、学級担任を中心とした学級経営が重要視されるようになる<sup>(7)</sup>。この学級担任による学級経営の積極的な意義づけから、教員の資質向上へと関心が高まることとなる。こうした傾向は、今日まで続いている。

ところで、学級経営とは、どんな役割を果たす実践なのであろうか。

1964年（昭和39年）刊行の著書である宮坂哲文の『学級経営入門』で、彼は次のように述べている。

学級経営は、ほんらい、目的的な実践であって、そのなかに教科指導のしごと、生活指導のしごと、それぞれが固有の論理と任務とをもちながら、統一的におりこまれているものとしてとらえたい<sup>(8)</sup>。

教え込みによる一斉授業ではなく、教科の学習が子どもにとって生きて働く学力として定着することを目的とすべきであるとしている。さらに、生活指導は、どのような実践を期待しているのであろうか。

学級の自治活動のなかで、一人の問題を集団全体の問題にひろげて、みんなで意見を出しあい、力を合わせて困難な問題にとりくみ、民主的協力の価値をすこしでも体得した子どもたちは、たとえそれが教科の学習のなかみと直接つながらず、また教科の成績の向上

と別段の関係がなかったとしても、かれらはそれによってまぎれもないよい教育を受けたといわなければならない<sup>(9)</sup>。

学習指導と生活指導の統一を目指した宮坂は、こうした実践を「学級づくり」と呼び、具体的には、教室に文化的な性格の実践を展開すべきだと提唱している。

学級文集、学級新聞、壁新聞、学級日誌、グループ日誌などにみるような学級の子どもたち自身の文化活動に重点を置いて 中略 学級の誕生会や学級集団が展開する演劇活動その他のいわば学級としての行事活動なども、いうまでもなく学級集団の文化活動である<sup>(10)</sup>。

学級には多くの掲示物があり、読書感想文集、図書係の活動があるようにすべきだとしている。いわゆる、学級経営には、学級文化活動が必要であると提唱している。

ところで、学級に学級文化活動を導入するということは、教師と子ども的人格的な結びつきを目指すことであり、それは、学級が生活共同体としての性格を強めていくことである。ここに日本の学級経営の独自の特徴があると言える。概念的に言えば、日本の学級経営は、教育内容や指導の方法とは区別され、「こうした教育活動を効果あらしめる行為・機能とみなされている。授業自体ではなく、いい授業にするためにはどうするかが経営ということになる。」と児島邦宏は指摘している<sup>(11)</sup>。さらに、経営の中味を詳しく見ると、学級経営を教授の効果をあげるための条件整備とみるか、教科指導と生活指導という二つの機能から教師の統一的な日常的実践的な形態と見るかといった見解が議論される。この点について、白松賢は、日本の学級経営概念には、「条件整備」と「学級づくり」の二つの概念が混在していると指摘した上で、宮坂哲文が戦後に展開した学級経営論の考え方を支持すべきだとしている。なぜなら、彼の主張には、 学校経営・学年経営・学級経営における調和、 学習指導（授業）と生活指導（生活教育）との調和という二つの調和型学級経営論が展開されているからであるとしている。戦前に見られた「学級王国」とトップダウン的な学校経営従属型の学級経営論の問題を乗り越える上で調和的な学級経営論は極めて重要な出発点とすべきであるとしている<sup>(12)</sup>。

つまり、学級経営は教科（学習）と生活の両面から学級担任によって調和的に展開される必要があると言えるのではないだろうか。

## 「6の2だより」の概要

以上が学級経営の目的と実践内容の大筋である。次に、「6の2だより」の検討に入る。「6の2だより」は、1976年（昭和51年）4月から翌年の3月までの1年間の記録である。

今から約 40 年前の本稿の筆者が 30 歳代はじめ頃の学級経営のあらましを綴ったものである。「6 の 2 だより」を発行しようとした 1976 年は、日本では「学級崩壊」という現象が顕在化している時代背景があった。日本の学校は、1970 年代（昭和 45 年代）後半から「荒れ」はじめたといわれている。校内暴力や不登校が増え始めた時期である。学級通信を始めたのは 1976 年であり、学校の状況はそれほど落ち着いていたわけではなかった。授業成立と学習へ真剣に立ち向かう子どもの姿勢をつくり出すために通信を活用しようと苦慮した。一方で、「学級づくり」型学級経営に立つ通信の内容は、子どもの生活の様子を出来るだけつばさに把握して、その中から学級生活向上につなげられるものはつなげていきたいという思いがあった。こうした時代背景を基に、学級通信を始めた。通信は、およそ 1 カ月に B4 一枚程度を目安にした。具体的には、下記の通りである。かぎっこ内は「6 の 2 だより」の見出しである。

(1) 子どもの行動を観察し、解釈する記録

- ・「あたり前のことから出発 自覚させるとのこと」（昭和 51 年 5 月）
- ・「子どもがみえない」（7 月）
- ・「先生なんか、大っ嫌い 子どもと教師の衝突」（9 月）
- ・「ゆれる心、ばく発する行動」（10 月）
- ・「塾、その姿」「迷い、手さぐり、不安・・・」（11 月）
- ・「これでいいのかな？」（昭和 52 年 2 月）

(2) 学級生活の設計を試みる記録

- ・「問い直すもの 何のために班をつくるのか」（6 月）
- ・「時代の潮流のなかで 再び話し合い活動の実践にかかわって」（6 月）

(3) 学習環境を整備する記録

- ・「やる気をもたせるとのこと」（6 月）
- ・「実践の過程をたいせつにして 週目標を守ろう」（6 月）
- ・「テスト勉強を育てる学習日記」（6 月）
- ・「流れをつかませる歴史学習」（6 月）
- ・「児童の実態から 家庭のしつけとの接点はどこか」（6 月）
- ・「数の世界でとまどう子どもたち」（6 月）
- ・「教師反省テストとは 真の評価に結びつくテスト」（7 月）
- ・「節のある夏休みを」（8 月）
- ・「歴史クイズにわきたつ教室」（9 月）
- ・「先生がたもびっくり、自由研究発表会」（9 月）
- ・「カビもびっくり、カビ・カビ・カビ・・・」（10 月）
- ・「理科『木の育ち方』 学習日記（児童作成の原文）」（10 月）

(4) コミュニケーションを図る記録

- ・「はじめにもどろう 6年2組、運動会での勇気ある行動」(10月)
- ・「思いつき・くふう・創造 展覧会でのポスター作り」(昭和52年1月)
- ・「これでいいのかな? 成長について(男女の協力)」(昭和52年2月)

(5) 問題解決を図る記録

- ・「話し合いは学習の基礎である 子どもどうしが評価する話し合いの活動」(6月)
- ・「人間性をゆがめる話し合い活動」(6月)

「6の2だより」の内容は、先に述べた白松賢による「条件整備」と「学級づくり」の二つの学級経営概念が、ほぼ同じ割合であることが分かる。すなわち、上記の(3)学習環境を整備する記録(条件整備)と(1)子どもの行動・(2)学級生活の設計・(4)コミュニケーション・(5)問題解決の記録(学級づくり)である。学校が「荒れ」はじめた時代背景が授業成立と学習へ真剣に立ち向かう子どもの姿勢をつくり出すために苦慮した様子が分かる。一方で、「学級づくり」型学級経営に立つ通信の内容は、子どもの生活の様子を出来るだけつぶさに把握して、その中から学級生活向上につながられるものはつなげていきたいという思いが伝わってくる。

### 「6の2だより」とナラティブアプローチ

さらに詳しく学級通信の内容を「学級づくり型」の観点から検討してみる。例えば、「子どもがみえない」(7月)の学級通信では、次のようなことが書いてある。

「指導はすべて子どもの実態から始めよ」ということばがあります。教科の指導にせよ、教科外(委員会・クラブ・学級会や道徳・その他)の指導にせよ、まず、子どもがどの程度の段階にあり、どこに問題があるか。それを知ってから具体的な指導の計画を立て、実際の指導に入れ、ということです。中略ところが、この実態を知る手だてというものは、実際にはなかなかむずかしいものです。たとえば、社会科で、歴史上の一つの時代から、次の時代への移りかわりの関連を子どもがどの程度理解しているかの実態を知ろうとする時、まず、何を基準としてアンケート項目をつくるか。どんな内容で何を中心に答えさせるか。アンケートの形式をどうすればよいかなど、いろいろな問題が含まれてきます。

つまり、わたしたちが考えている以上になかなか子どもの本当の姿というものはみえないものです。

教師が自らの経験に頼って授業を成立させていけば、「とりとめのない」授業の広まりと言われかねない。しかし、子どもの実態を把握するという事は簡単には出来ない。で

はどうするか。学校には各教科に即応した教育課程がある。多くの学校で、教育課程はB基準（普通の基準）で作成されている。その基準に基づいて授業をしてみて、基準を上げればいいのか、下げればいいのかを判断する。上記のアンケートも、その判断基準に応じて作成すれば、子どもの実態把握に役立つのではないか。こうしたことをナラティブに伝える必要があると思われる。それこそが、子どものつまずきを発見しようとする試みに繋がるのではないだろうか。

「ゆれる心、ばくはつする行動」（10月）の学級通信でも、同様なことが言える。

#### 授業中のことです

教師：A君、となりの人と話をやめなさい。

A：だって、Bさんが話しかけてきたんだもん。ぼくは悪くないがね。

#### 給食後のことです

教師：牛乳がまだ残ってますよ。だれの当番ですか。

近くにいた子；CさんとDさんです。（CがいてDはいない）

教師：C君、早くあきびんを給食所へ持っていきなさい。

C：ぼくは牛乳を持ってきたから、返すのはDさんだもん。ぼくは知らんね。

こうした学級で起きた子どもが反発した事例を掲載してから教師は「からだの発育と心」という学級指導を行い、保護者に向けて次のように語りかけている。

「なぜもんくばかり言うの。」「どうして、たて言をつくの。」というよりも、まず、心とからだのアンバランスになるしくみを話しましょう。子どもが納得すれば自然に素直さをとりもどすのが、この時期の子どもの特性だと、私は痛感しました。

上記の学級通信では、子どもが反発する態度を非難することよりも、子どもを理解しようとする教師や保護者の姿勢を大切にしたいと訴えかけている。子どもの発達段階に着目し、その段階における子どもの心の在りように寄り添っていかうとする教師の取り組みである。ではどのようにすれば子どもの心に寄り添うことが出来るのか。

学級通信を配布してからしばらくしてのことである。私が学校の掃除道具を集めた部屋で古くなった掃除道具を集めて新しいものと交換する作業をしていた時のことである。そこへC君が通りかかり、私に声をかけてきた。「先生何してるの？」私が、「掃除道具の交換だよ。」と言うと、手伝ってやると言っ古くほうきや塵取りを紐で縛って廃棄する段取り作業を始めた。「こんなことも先生がやるんだね。」と言って、黙々と手伝ってくれた。「嫌なことでも誰かがしなければ学校はきれいにはならないからね。」と私が言うと、C君は、「協同作業が必要だね。」と言って少し晴れ晴れとした顔をした。この時私は、C君と心が通い合ったような気がした。子どもとの対話が重要なことに気づかされた。



上記の事例でも、体と心といった一般的な授業だけをして終わるのではなく、対話の重要なことを子どもたちに訴えるべきであったと反省した。いわゆるナラティブな接近の仕方が大切であると実感した。

こうした例は、学習を子どもに定着するための様々な工夫にも見られる。「教え込み」の学習ではなく、「子どものわからなさ」を克服しようとしたものである。学級通信「流れをつかませる歴史学習」(6月)には次のようにある。

6年2組の教室では、歴史単元に入った第1時限でM子さんの「おいたちの記」をまとめました(よちよち歩きの時代、いたずら盛りの時代・・・)次に、このおいたちの節(幼児期や少女期など)が現在のM子さんにどのように関係しており、今後のM子さんにどんな影響を与えるかを考えました。そして、日本の歴史を学習するということは、M子のおいたちを考えたのと同じように、日本のおいたちを学び、現在の日本の姿を見つめ将来の姿を考える基礎を養うのだと指導しました。

また、「数の世界でとまどう子どもたち」(6月)の学級通信には次のようにある。

$$2l : 8l$$

$$2dl : 8dl$$

とりあげられた量が異なっても、割合としては同じように2:8になる。これをさまざまな量(容量・重さ・広さなど)で何度もくり返しながらおさえる。

量を割合として数におきかえられたら、次は数のしくみを教える必要があります。

8をもとにした2の割合は、 $2 \div 8$ で4分の1(0.25)であること。これは、 $2l$ と $8l$ の場合でも、 $2dl : 8dl$ の場合でも同じである。すなわち、割合という数の世界で考えてみると、量の問題が分かりやすくおきかえられ、割合を使っているいろいろな問題を解くことができることを指導する必要があります。

この記録では、子どもに指導する時、概念をそのまま教えるのではなく、子どもの身近な体験や概念を砕いて教えることに心を砕いている。いわゆる「教え込み」ではなく、子どもと共に話し合っ概念を理解させることに重点を置いている。

先述の野口裕二は、教室はナラティブコミュニティとしていくことが大切であると主張している。彼は、その著書『ナラティブの臨床社会学』の中で次のように述べている。

(学級は)一つの物語を共有し再生産するのではなくそれを新たに展開していく場であり、「新しい語り」、「いまだ語られなかった物語」を生み出すための場である<sup>(13)</sup>。

学級をナラティブコミュニティとして捉え直すと、これまでの「子どもによる体験型の学習」は、子どもと教師が共にアクティブにかかわる場として精彩を放つのではないだろうか。

「6の2だより」の「学級づくり」型学級経営のなかには、「問い直すもの 何のために班をつくるのか」(6月)がある。その記録は、次のようである。

- (1) 班長を先に選ばせ、次のその班長を中心にして班員を決定していく。
- (2) 子どもの希望を取り入れながら、班をつくっていく。次に、つくった班の中から互選によって班長を決定する。

(1)の編成の場合、班長の自覚が生まれ、学級に数人のリーダーを生み出す。しかし、班長にかかる仕事への負担が大きい。

(2)の編成の場合、班の中で責任のぶつけ合いが起こり、班長がリーダーとして育ちにくい。しかし、選んだ班員すべてが責任をもって班長をもちたてる必要があるという観点から小集団全体が責任をわかち、班員全体を指導しやすい。

それぞれに長所があり、短所があると思います。(1)の場合、指導の仕方をまちがえると、班長だけが集中的に攻撃され、追及される危険性があります。一方、(2)の場合は、ともすると班全体が指導しにくく、まとまりのないものになりがちです。

こう考えてくると、班は何を目的につくるのか分からなくなってきます。この学級では、(1)の方法による班編成をとっていますが、わたしが班をつくる時に考えた指導の指針は、「班は学級の中の児童と児童、教師と児童の人間関係を高めるためにつくる」ということです。

しかし、人間関係を高めるといふ一つの視点をもって、それはあまりにばく然としていられると思います。班は、もっとはっきりとした目標をもってもいいのではないのでしょうか。

この記録は、教師の悩みで終わっている。しかし、学級に班を作る目的を子どもと共に考えようとする姿勢は、この後も続く。同じ6月の2回目の学級通信には次のような記録がある。「時代の潮流のなかで 再び話し合い活動の実践にかかわって」(6月)である。

「基本的に忠実なれ！」それはどういうことかといいますと、教師と児童、児童と児童の人間関係を大切にすることです。また、その基盤である話し合いの活動を充実していくことです。中略 話し合いの活動を通してお互いの人間関係をより密接なものへと深めていくためには、取りあえず子どもたちの中で話し合い活動そのものを活発にし、自発的に行えるようにしていかなばなりません。中略 計画委員会をひとつのネックとして、実践に結びつく話し合いの計画(話し合いの順序や小柱立て)。実際に話し合い

の結果が実践されているかの確かめ。そして反省の上に立った次の計画。こうした一連の過程を教師と児童が一体となって活動し、ちえを出し合いながら新しい活動をめざしていく。この中にこそ人間関係を深めるすべがあると考えています。

この記録の背景にあるのは、当時「荒れ」はじめた学級において、授業を成立させることやと子どもの学習への真剣さをいかに作りあげるかという教師の切実な思いがあった。そのために、子どもと共に話し合って学級を創りあげ、子どもと教師が共感して学級の活動を進めたいと考えた。いわゆる子ども参加の学級づくりである。

しかし、班作りも話し合い活動も目的とするもの自体がみえない中で試行錯誤しなければならなかった。学級をナラティブコミュニティとするにはどうすればいいのか。それが課題であった。そこで、次のような目標を立てることとした。班作りについては、班の活動を通して班員の自立支援を目指す。話し合い活動については、学級の協働ネットワークづくりを目指すということである。班の中で個人の自立支援体制を作るには、各班で取り組む共通課題が必要である。例えば、「チャイム着席を守ろう」「宿題忘れをなくそう」などである。こうした課題の達成を各班で競わせ、個人の自立を促そうと考えた。取り組みがうまく進んでいない班には、班長会で教師と各班の班長で班員の問題点などを洗い出し、個別の話し合いを進めた。この結果、班長にも班員にもやる気が出てきたようである。

話し合い活動については、学級にはどんな問題があるか、それをどのようにして議題とするかを計画委員会で教師を交えて話し合った。各自が嫌なこと（例えば、服装の汚れをからかわれる、持ち物の整理整頓が出来ていないことをバカにされるなど）をどのようにすれば皆で話し合う議題として提案できるかを整理して問題点を絞った。その際、教師が最も注意しなければならないことは毎日の授業や給食時の会話などで常に一人一人を受容することだと思った。そうした構えを積み重ねることによって子どもの情緒が安定し、嫌なことを嫌だと言える雰囲気醸成が醸し出されると考えられた。議題の提案から問題点解消の話し合いは、うまくは進まなかったが、教室には、皆で問題を考えようとする気持ちが生まれてきたと実感できるようになってきた。

この取り組みは、班作りや話し合い活動という子どもと教師による「活動」を通して学級の「荒れ」を防ごうというものである。授業成立と学習へ真剣に立ち向かう子どもの姿勢づくりの実践である。これは、先に述べた野口の主張するオープン・ダイアログによる「対話の生成する場所であるネットワークを重視し、そこに直接働きかける」ということとつながるのではないかと考えられる。私が行った子どもの言葉や行動を常に受容してひとりひとりの情緒を安定させる取り組みによって、教師の愛という感情が生成され、子どもが前向きに受け止めていてくれたなら、この上ないことである。

## まとめ

今日の教育現場では、新自由主義の教育政策における職場への職階制の導入、人事考課による教員の序列化、いじめ・不登校などの対応による教員の多忙化、そして子どもの貧困問題など、教師と子どもの「生きづらさ」が際立っているように思われる。

そこで、筆者自身の実践記録「6の2だより」を具体的な素材として学級経営のあり方をナラティブ・アプローチの枠組みを用いて検討を試みた。この検討から判明した諸点は、下記の通りである。

- 1 実践記録は、実践を出来事として記録するだけではなく、その記録が教師のどのような考えから生み出されたものか、子どもとのかかわりがどのようなであったかを詳細に述べてこそ、記録の価値がある。つまり、ナラティブに述べるのが重要であることが分かった。それは、野口裕二の主張にあるナラティブ・アプローチ及びオープン・ダイアログの考え方である。つまり、対話とその対話が生まれてきた背景を明らかにしてこそ記録は感情を伴ったものとして生成するというものである。
- 2 学級通信「6の2だより」を野口が主張するナラティブ・アプローチ及びオープン・ダイアログの観点で考察した結果、記録にある事実を生み出した教師の指導の観点やどのようにして問題事態を解決しようとしたかという背景が浮き彫りになった。通信から引用した6項目からは、次のことが考察された。

「子どもがみえない」(7月)の通信では、教師の指導観が明確になった。「ゆれる心、ばくはつする行動」(10月)の通信では、子どもとの対話の重要性が分かった。

「流れをつかませる歴史学習」(6月)及び「数の世界でとまどう子どもたち(6月)の通信では、子どもの体験を基にした学習による学級のコミュニティづくりの大切さが分かった。「問い直すもの 何のために班をつくるのか」(6月)及び「時代の潮流のなかで 再び話し合い活動の実践にかかわって」(6月)の通信では、班作りや話し合い活動の目標を明確にすることと子どもと受容的に接することの重要性が分かった。
- 3 学級通信「6の2だより」は、学級経営の観点から見ると、授業成立のための取り組み(条件整備型学級経営)と「学級づくり」型学級経営に二分される。通信におけるその配分もほぼ同数である。このことは、前述の白松賢が支持した宮坂哲文の調和型学級経営論に見られる学習指導(授業)と生活指導(生活教育)との調和という考え方に準拠していると言えるのではないだろうか。したがって、今後の学級経営も上記の二つの視点で実践することが望ましいと思われる。
- 4 今後の学級通信のあり方については、事実としてあった出来事や問題事態をつぶさに

記録として残すことだけに腐心するのではなく、その記録の背景にある教師の指導観や教育観を合わせて発信することが重要であると考えられる。そのためには、ナラティブ・アプローチ及びオープン・ダイアログの観点を参考にして、教師の子どもを思いやる愛と感情を伝えることが何よりも重要なことと思われる。

註

- (1) 高田哲郎他『中学校教育実践叢書No.25 学級・学年通信』あゆみ出版、1983年。11～14ページ、高田哲郎（埼玉県の中学校教諭）の担当執筆箇所から引用。
- (2) 野口裕二他『ナラティブアプローチ』勁草書房、2009年、10頁。
- (3) 野口裕二「ナラティブとオープンダイアログ アディクションへの示唆」『アディクションと家族』30巻2号、2015年、104頁。
- (4) 同上、108頁。
- (5) 教育史研究会編『明治以降教育制度発達史』文部省教育編纂会、1938年。
- (6) 佐藤秀夫「明治期における『学級』の成立過程」『教育』6月号、1970年、24頁。
- (7) 平井貴美代「明治期学級担任配置の研究 学校経営的関心の対象としての学級担任配置」『学校経営研究』20巻、1995年、87頁。
- (8) 宮坂哲文『宮坂哲文著作集』 明治図書、1975年、164頁。
- (9) 宮坂哲文『生活指導の基礎理論』誠信書房、1962年、174頁。
- (10) 前掲書、宮坂哲文、『宮坂哲文著作集』、前出、173頁。
- (11) 児島邦宏『学校と学級の間：学級経営の創造』ぎょうせい、1990年（シリーズ・教育の間、第8巻）24頁。
- (12) 白松賢「授業/学級づくりに関する教育方法学的研究（1） 教育課程にみる『学級経営』概念の日本の特色に着目して」『愛媛大学教育学部紀要』第61巻、2014年10月、74頁。
- (13) 野口裕二『ナラティブの臨床社会学』勁草書房、2005年、184～185頁。